

勝道上人（735-817）

僧侶であり山岳修行者でもある勝道上人は、日光山の伝統的な宗派の創始者である。日光の南東 50 キロに生まれた勝道上人は、下付の薬師寺をはじめとする寺院や僧院で長年の修行を積んだ。766 年には、修行による悟りを得るために男体山に登頂した。山の麓を歩いていたとき、中禅寺湖に出くわした。湖から昇る観音像を見た勝道上人は、生きた桂の木から観音像を彫ろうと考えたという。正道は 782 年、3 度目の挑戦で男体山に登頂した。

円仁（794-864）

慈覚大師の諡号を持つ円仁は、中国に 9 年間滞在して密教を学んだ。彼は、輪王寺が属する天台宗の第三祖となった。848 年、京都比叡山延暦寺の住職を務めていた円仁は、仁明天皇（808～850）の命により日光山に派遣され、日光山を日本の精神的に守る強力な宗教組織へと発展させた。円仁は、三仏堂、浄行堂、法華堂を建立した。在任中には、日光山の三十七寺を管理し、天台宗の始まりに影響を与えた。

天海（1536?～1643）

慈眼大師の名で知られる天海は、天台宗の僧侶であり、輪王寺の第 53 代住職である。1613 年に日光山再興を命じた徳川幕府との関係が深かった。1616 年には徳川初代将軍の徳川家康（1543～1616）が天海に葬儀を司ることと諱号を選定することを求めた。天海は家康の菩提を弔い、東照宮に家康の霊を祀った。また、天海は三代将軍徳川家光（1604～1651）の命により、江戸（現在の東京）に寛永寺を建立した。天海の代から、輪王寺の貫主は、寛永寺の貫主でもあった。延暦寺、寛永寺、輪王寺は天台宗の三大寺院である。